

まえがき

言語活動では、個々の音ないし音素は、語彙の意味の弁別や情報の伝達のための恣意的な記号の集まりの一部としての使用の他に、個別の音そのものが特定の意志や感情を表現したり、聞き手の興味をひきつけたりするために利用される。これを音象徴的機能と呼び、これには、いわゆるあいづちなどで非語彙的な音を使用したり(Ward 1998, 2001)、人の話し方や動物や事物の音の特徴をまねしたりすることが含まれる。

音をこのように使うことの1つのメリットは、言語的な情報の伝達の妨げにならずに、同時またはほぼ同時に異種の情報を流せることにある。この際、異種の情報とは、言語的に流される情報を補うこともできれば、それを否定することもできる。例えば、同じ「はい」でも積極的なのか、いやいやなのかをピッチの特徴によって表現することができる。また、「ははー、へー、ほー」に見られるように、/h/を使って相手の考えに注目していることを示し、「ふむ」に見られるように鼻音を使って、考慮中であることを表現したりすることができる(Ward 1998)。このような場合、情報処理のしやすい、単純で非常に短い音が会話の流れを助けている。この種の音象徴的な音の使い方は日本語だけに限られたことではなく、英語についても同じ様な音と意味の対応が報告されている(Ward 2001)。

音象徴的機能は、こうして、オノマトペの体系外にも、存在するわけだが、特に日本語のオノマトペは、これを組織的に体系化した語彙システムだと言える。オノマトペを使うことのメリットも、抽象化された一般語彙が流せないような情報を、短時間で流せることである。それは、オノマトペが音の直接的なイメージ喚起力に頼っており、しかも語彙を形成する様々の要素が意味のユニットとして使われているからである。確かに、1つの状況はオノマトペを使わなくても、表現できる。だが、「風がピューっと吹いてきた」とか「彼はキョロキョロとあたりを見回した」を「ピューっと」や「キョロキョロと」を使わずに説明しようとしたら、いかに面倒かを考えれば、オノマトペの効率を認めざるをえないだ

ろう。オノマトペが、「生き生きとした描写」であるとか「臨場感」があるとか言う印象は、1つには、この効率のよさによっているのだと考えられる。このような情報を伝える上でのオノマトペの有効性については最近では、工学や医学の領域でも認められている(篠原・宇野 2013)。

しかし、日本語のオノマトペの特徴は、情報を効率よく伝えるために有効だというだけではない。一般に、オノマトペは、言語的な核の外側に存在すると思われているが、日本語のオノマトペの場合、日本語の構造と切っても切れない関係にある。1986年に本書の著者が英語の博士論文(Hamano 1986)で日本語のオノマトペの音韻的な特徴を体系的に扱って以来、様々な研究者が日本語のオノマトペの音韻的、統語的な特徴などを明らかにしてきている。それは、おどろくべき整合性に満ちている。本書の目的は、そのようなオノマトペの構造的な美しさと歴史的なバイタリティを一般に理解してもらうことである。

今回本書を書くに当たり、著者が1998年に出版した英語論文(Hamano 1998)の大筋の方向は踏襲することにした。というのは、この論文には、16年たった今でも有効な記述や分析が含まれており、その主な主張を日本語に書き直すことは、現時点でも、価値のあることだと、判断したからである。ただ、その構成が、オノマトペを実際に使っている日本の読者に意味のある構成であったとは言いがたい。そこで、本書は、より日本の読者に意味のある構成にしたつもりである。また、この16年の間にはより優れた分析も出てきているし、著者もそれに触発されて分析を変えたり、方言研究に基づいて独自の分析を加えたりしたところもある。つまり本書は1998年の論文の日本語訳ではない。読者が、本書を読んでオノマトペの深さを認識し、特に御自身の方言におけるオノマトペについて考える際の参考にしていただければ、幸いである。

本書の第4章の執筆にあたっては、岐阜工業高等専門学校の菅原崇氏とのディスカッションに触発されたところが大きいにあった。また、くろしお出版編集部の池上達昭氏には、多岐にわたり非常にお世話になった。心からお礼を申しあげたい。

目次

まえがき	i
------------	---

第1章 オノマトペの構造的特徴の概観

1.1 オノマトペの認定における無声両唇破裂音 /p/ と方言の役割	2
1.2 オノマトペの2種類の語根.....	5
1.3 副詞用法に現れるオノマトペの形態	13

第2章 オノマトペの基本的な音象徴

2.1 子音の基本的な音象徴.....	20
2.1.1 障害音の有声無声の対立	20
2.1.2 両唇破裂音 /p, b/	22
2.1.3 歯茎破裂音 /t, d/	25
2.1.4 軟口蓋破裂音 /k, g/	28
2.1.5 歯茎摩擦音 /s, z/	32
2.1.6 歯茎鼻音 /n/	33
2.1.7 硬口蓋接近音 /y/	34
2.1.8 両唇または声門摩擦音 /h/	35
2.1.9 両唇接近音 /w/ ないしは母音ではじまるもの	36
2.1.10 両唇鼻音 /m/	37
2.1.11 歯茎弾き音 /r/	38

2.1.12	口蓋化	38
2.1.13	まとめ	39
2.2	母音の基本的な音象徴	41
2.2.1	CVタイプの語根に現れる母音の音象徴	41
2.2.2	CVCVタイプの語根に現れる母音の音象徴	46
2.3	その他の音象徴	51
2.3.1	二重母音 /ui/ と /oi/	51
2.3.2	拍の挿入	51
2.3.3	接中辞「ッ／ン」	55
2.3.4	長音化	56
2.3.5	重複	57
2.3.6	接尾辞「リ」	57
2.3.7	アクセント	58
2.4	オノマトペはどこまで擬音語か	60
2.4.1	CVタイプの語根から派生する擬音語	61
2.4.2	CVCVタイプの語根から派生する擬音語	65

第3章 オノマトペの意味の拡張

3.1	メタファーによるCVCVタイプの意味の拡張	73
3.1.1	視覚から認識への拡張	74
3.1.2	言葉に関するメタファー	75
3.1.3	物をはめる行為から抽象的なはめる行為への拡張	75
3.1.4	物に当たることから物事に対処することへの拡張	76
3.1.5	物への接触から抽象的な対人関係への拡張	76
3.1.6	物の回転移動から状態の変化への拡張	77
3.2	メトニミーによるCVCVタイプの意味の拡張	79
3.3	異形のタイプ別に見られる意味の拡張の傾向	83
3.4	CVタイプの意味の拡張	86

第4章 オノマトペと一般語彙

4.1	一般副詞化したオノマトペ.....	98
4.2	一般語彙に見られる音象徴.....	104
4.3	オノマトペ起源と見られる動詞.....	105
4.4	オノマトペから派生する「する動詞」.....	110
4.5	オノマトペから派生する「めく動詞」と「つく動詞」.....	118
4.6	オノマトペの形容詞的用法.....	120

第5章 オノマトペの音韻制約と音象徴

5.1	有標の構造と無標の構造の競合.....	124
5.2	韻律的な鋳型の存在.....	128
5.3	その他の音韻制約.....	131
5.4	オノマトペの音象徴と音韻制約の関係.....	132

第6章 オノマトペと日本語の音韻変化

6.1	オノマトペに見られる弁別的な口蓋化.....	138
6.1.1	口蓋化の意味	138
6.1.2	口蓋化の分布	140
6.1.3	口蓋化の音韻論的説明	144
6.1.4	漢語および和語との比較	148
6.2	両唇破裂音 /p, b/ の問題.....	151
6.2.1	オノマトペの障害音の有声無声の対立	152
6.2.2	両唇破裂音 /p, b/ の特殊性	154
6.2.2	母音間の有声両唇破裂音 /b/ の音韻史的説明	157
6.2.3	音韻変化での音象徴の役割	159

おわりに	161
参考文献	163
索引	167

本書では、オノマトベという言葉で、日本語のいわゆる擬音語、擬声語、擬態語、擬容語、擬情語全体を指すことにする。本章の目的は、第2章以降で展開するオノマトベの考察に不可欠な基本的な構造的特徴の記述である。具体的には、オノマトベの認定での無声両唇破裂音 /p/ と方言の役割に触れた後、オノマトベの2つの語根タイプを明らかにし、さらにオノマトベがどのような形態でどのように使われるかの概略を記述することにする。

本書では、一部を除いて、オノマトベは、ひらがなや音声記号ではなく、カタカナで表記する。

1.1 オノマトベの認定における無声両唇破裂音 /p/ と方言の役割

外国語のオノマトベを研究する場合、最初の難関は何をオノマトベと判断するか基準が曖昧なことである。日本語のオノマトベ研究では、その点、1種の偶然が幸いしている。オノマトベが最も研究されているのは、共通語(あるいは、東京方言)であるが、その共通語で、無声両唇破裂音 /p/ は、外来語を除いては、オノマトベにしか現れない。つまり、/p/ を語頭に持つ「パッ、パタパタ、ポロポロ、パタリ」などの語彙は、確実にオノマトベだと言える。

しかも、これらの語彙は、オノマトベの体系の中で、量的にもかなりの比重を占める。オノマトベの語頭に起こりうる子音は、/p, b, t, d, k, g, s, z, h, m, n, y, w, (r)/ であるが、例えば、浅野(1978)の辞典にあげられた1,600ほどのオノマトベのうち、約6分の1が/p/ を語頭に持つ。また、Kakehi et al.(1996)のオノマトベ辞典でも、約7分の1の紙数を、/p/ を語頭に持つオノマトベにさいている。/p/ を語頭に持つオノマトベの比重は、非常に大きい。

/p/ を語頭に持つオノマトベが日本語のオノマトベの中核にあることは、その音韻特徴からも確認できる。オノマトベ一般であまり見られないパターンは、/p/ を語頭に持つものには、全く見られないのである。例えば、オノマトベでは、一般に語根の第2子音に有声阻害音が現れにくい。/p/ を語頭に持つものには、このパターンは全く現れない。

本章では、日本語のオノマトベの体系の中で、どのような音がどのような意味に結びついているかを、具体的に、子音、母音、その他の要素の順で検討する。その際、本書は第1章で触れたような語根の種類と語根内での位置による意味の分化を軸に分析をすすめることにしよう。この観点は Hamano (1986, 1998) で著者が明らかにしたが、分化の重要性をここで強調しておく必要がある。例えば、田守・スコウラップ (1999) は、Hamano (1986) の成果を利用して日本語と英語の音象徴を比較しているが、焦点が英語との比較にあることもあり、日本語のオノマトベ特有の、位置によるシステムティックな意味の分化がはっきりしない。これは、日本語のオノマトベ研究の観点から見ると、残念なことである。そこで、本書では Hamano (1998) の意図に沿い、語根の種類と語根内での位置に注意しながら音と意味のつながりを検討する。

また、CVCV タイプの C_2 の子音の意味を考える場合は、可能な限り /p/ を語頭に持つものを考慮に含むようにした。これも、第1章で指摘したように、/p/ を語頭に持つものは、確実にオノマトベと言えるために、音象徴の抽出に当たって、オノマトベ的ではあるがオノマトベではない資料をもとにして間違っただ一般化をすることを避けられるからである。/p/ を語頭に持つものがない場合は、断りをつけることにする。

2.1 子音の基本的な音象徴

まず語根の子音と意味の結びつきを検討する。子音、特に障害音は、位置によって象徴的な意味が違ふことが多い。

2.1.1 障害音の有声無声の対立

障害音とは、空気が口腔を通過して外に出る過程で流れを障害される音のことを言う。日本語では、/p, t, s, k/ と、対応する有声音 /b, d, z, g/ がそれにあたる。この障害音における有声無声の対立は、共通語のオノマトベでは、語根の頭だけに現れ、有聲障害音は、対応する無聲障害音に比べて、「運動の力や物の質量が大きい」ことを意味する。この違いは次のような、/p, b/ を語頭に持つオノマトベの例から明らかである。

第2章では、日本語のオノマトベのシステムでは、運動の音象徴が中核を占めることを明らかにした。しかし、日本語のオノマトベは流動的でダイナミックなシステムであり、ある1つのタイプの音象徴に固定化されているものではない。オノマトベ全体を見回してみると、個々の語彙の音と意味の結びつき方は様々で、ざっと見ても次のようなタイプがある。

まず、「ワンワン」、「ミンミン」のような動物のなき声の音まねがある。次に、「パーン」や「ハッ」のように語彙の発声方法と語彙が指示するものの間になりに強い相似関係があるという点で模倣的なものがある。さらに、「カチカチ」対「チカチカ」のように、音の持つ意味が位置によって制約されているという点では模倣性が落ちているものがある。しかし、これらは、まだかなり具象的な音象徴を持っている。加えて、「ワクワク」や「キッパリ」のように、感情や態度といった抽象的な音象徴を持つものがある。最後に、「ぐっと」のように、運動とは全く関係がなくなって程度副詞になっているものや、「きっと」のように、確信の度合いを示す陳述副詞になっているものがある(このタイプは通常ひらがなだけで表記される)。しかも、1つのオノマトベでも、「ギリギリ」や「カラカラ」のように、多様な意味を持ち、品詞的にも、いくつにもまたがるようなものが多数ある。

このダイナミックなシステムの中で、個々の語の意味は変化し続ける。そして、それは、呂(2003)が「コロコロ、コロッ、ゴロゴロ、ゴロッ」の認知言語学的分析でも主張しているように、圧倒的にメタファー(隠喩)とメトニミー(換喩)のリンクによって起こる。音象徴自体、1種の比喩であるのだが、オノマトベは、音象徴に始まる、巨大な、広義の意味での比喩の構造だと言ってもいい。

本章では、オノマトベ語彙の意味がメタファー及びメトニミーによって拡張される過程を、副詞用法に限って考察しよう。そのような拡張と様々の構造的な変化を経て、オノマトベが語彙化されていく過程については、第4章で扱うことにする。また、本章は、最初の分析の段階で対象をCVCVタイプのオノマトベに限っている。それは、CVCVタイ

前章の副詞的用法の検討でもその一部が明らかになったように、日本語のオノマトペは流動的でダイナミックなシステムであり、一般語彙とのゆるい境界線を越えて一般語彙的な意味や統語役割を獲得している。そもそも、オノマトペと一般語彙の境界線は、一般語彙と漢語や外来語との境界線ほど、強いものではなく、この2つの語彙層は、共生的な存在であり、多くの要素を共有しているのである。

本章では、ほとんど完全に一般副詞化したと思われるオノマトペ起源の副詞にも音象徴の要素が残り、また一般語彙(と考えられているもの)の中にも多くの音象徴が存在することを示し、特に一般動詞の中でも、かなりの動詞がオノマトペ起源と考えられることを示す。それと同時にオノマトペからは多くの動詞や形容動詞が生産的に派生され、それらには、オノマトペの副詞用法からは予測できない、音象徴とは無関係な、様々の、意味的あるいは形態的制約がかかることも明らかにする。これらの事実は、オノマトペの周辺では、一般語彙的制約と音象徴性とが競合していることを表している。

4.1 一般副詞化したオノマトペ

第3章では、特定の動作と結びつかず動詞との共起制限が弱い、程度副詞的オノマトペの派生の過程を検討した。ここでは、まず、そのような副詞をまとめ、そのような副詞にも音象徴の一部が残っていることを確認しよう。

CVタイプのオノマトペからは次のように、多くの速さや量に関係する副詞が派生する。これらは、一般語彙化していることを反映して、通常は、ひらがなで表記され、引用の助詞「と」との境界が不明瞭になる。(しかし、本章では、オノマトペ起源であることを強調するためにカタカナを使う。)

ドット、ドンと、サット、サッサと、トットと、セッセと、
ドンドン、グングン

第4章では、一般語彙の中にも音象徴的な要素が見られることを確認し、同時に、「する動詞」、「つく動詞」、オノマトベの形容動詞など、語彙化したオノマトベの特性の1つとして、一般言語的な意味上の制約や形態的制約が、音象徴の意味とは関係なく自律的に作用するということを処々で指摘した。例えば、副詞的なオノマトベは、人間の意図的で具体的な運動のあり方を修飾できるにも関わらず、そのような運動を意味する「する動詞」は成立しない。また、「する動詞」の派生に関わるのは、制限された形態であるし、「つく、めく」につくのは、CVCVタイプの語根1つのみである。「カラ」のようにC₂に/r/を含む語根の場合、音韻的制約のために、重複形だけが形容動詞を派生する。

ところで、上にあげたような自律的な制約のうち音韻的制約は、一般語彙化したオノマトベのみならず、既に、副詞用法のオノマトベにも広範に見られる。実際、近年の日本語の音韻論では、音韻論的、形態論的な立場からのオノマトベの研究が進み、日本語のオノマトベが非常に言語的な制約を受けること、一般語彙の語形成と不可分の関係にあることなどが、明らかにされてきており、日本語の音韻組織を語るのにオノマトベは、欠かせないものになってきている。本章では、その中でも特に洞察が深い那須の一連の研究を中心にオノマトベの音韻制約を考え、最後に音象徴と音韻制約の関係について若干私見をまとめ、第6章への繋ぎとすることにしよう。

5.1 有標の構造と無標の構造の競合

那須(1999c)は、オノマトベの音韻構造(特に韻律構造)を理論的な立場から扱った草分け的な論文の1つである。この論文で那須は、「ピッカピカ」などに見られるオノマトベ形容動詞における強調の接中辞の挿入について興味ある観察と分析をした。

CVCVタイプの語根から派生する重複形形容動詞には、「ピッカピカの」の他に、「ピッカピカの、ピカッピカの、ピカピッカの」など、促音の挿入部だけに違いのあるものが見られる。那須によれば、これらのタイプは、共通語使用者に全て適格なものとして受け入れられるのでは

第1章から第5章までで、オノマトペは一般語彙と連続体を成しながら、かつ、音象徴的な特性を維持していることを、確認してきた。本章では、日本語の音韻の歴史でも、オノマトペは、一般語彙の音韻変化と密接な関係を持ちつつ、独特の対応をしてきたということ、オノマトペの2つの音韻特徴を根拠に主張する。その1つは、口蓋化された子音の分布であり、もう1つは両唇破裂音の分布である。口蓋化された子音の分布は、オノマトペでの口蓋化が、漢語での口蓋化とは起源を異にし、むしろ、和語に見られる口蓋化と共通していることを示す。また、オノマトペの両唇破裂音の分布は、いわゆるハ行転呼のオノマトペへの影響という興味深い現象を示唆している。

6.1 オノマトペに見られる弁別的な口蓋化

ここで言う口蓋化とは、母音 /a, o, u/ の前で子音が弁別的に硬口蓋化して、「ピャ、ピュ、ピョ、シヤ、シュ、ショ」のような、いわゆる開拗音を生成することを意味し、母音 /i/ の前の無標の硬口蓋化とは、区別される。以下では、口蓋化の音象徴的意味を確認し、その分布特徴を音韻論的に説明し、さらに和語との連続性を明らかにする。

6.1.1 口蓋化の意味

第2章で、口蓋化は、「子供っぽさ」とか、「雑多なもの」といった音象徴的意味を持っていることに触れた。もう少し、具体的に言うと、口蓋化された子音が含まれるオノマトペは、「子どもっぽい落ち着きのない動き、雑多な音(をたてる運動)や安っぽさ、品のなさ」を表すものが多い。

「子どもっぽい動き」を表す例としては、次のようなものがあげられる。

ピョイ……………軽く飛ぶ様子
 ピョンピョン……………連続して飛び跳ねる様子
 ピョコピョコ……………弾むように上下に動く様子